

Title	昭和四十二年度秋季見学旅行記
Sub Title	
Author	藤村, 東男(Fujimura, Haruo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1968
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.40, No.4 (1968. 3) ,p.155(715)- 156(716)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19680300-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

昼食後、淡路人形館にて淡路人形を観賞する。出し物は「傾城阿波鳴門」で、一同しばらくの間この伝統芸術の中に引き込まれる。都会的文楽とは異なり、土臭い感じもするが、そこに古の芸能の本来の姿を見ることが出来たと思う。

次に淡路国分寺に向う。バスより降りしばらく歩いた所に今にも崩れそうな寺があり、それが国分寺であった。今残るものとしては当初のものを模した暦応三年在銘の丈六釈迦如来坐像と塔の礎石のみで、大柄に削り出した心礎の造り具合がよく残存していた。あたりの荒廃した状況といい何んとなく寂しい風景が眼に残った。

バスは西海岸の慶野松原に向い、そこでしばらく休憩する。砂と小石が特に美しい。次に松原から近い慶野組所蔵の銅鐸を見学し、持主の家まで行く。銅鐸は高さ三〇センチ程の弥生時代の比較的早い頃の小型の物であるが表面に動物らしいものが鑄出してあり興味深かった。清水先生より細かい説明を受ける。銅鐸をみた後、バスは洲本に直行し、洲本城の真下にある三熊旅館に到着する。今回の旅行最後の晩とあつて旅行参加者の紹介やら余興を行なう。

七月七日。再びフェリーボートで神戸に戻る。ここからは一応自由コースとなり、雨中の市内見物の組と、中山寺・安倉古墳に向う組のものと別れる。後者のコースは、先ず宝塚市の安倉高塚古墳を見学、地主さんの家にて同古墳出土の赤鳥七年鏡及びその他の出土品を見る。次に中山寺に向い、仏像彫刻と石棺、そし

て横穴式石室の立派な中山寺古墳を見学する。これにて今回の旅行の見学コースは全て終了し、一路三宮駅に向う。

午後二時半、市内コースの組ともども三宮駅にて見学旅行を一応解散する。

今回の旅行に於いては、播磨国の文化財や史跡をまとめた形で見る事が出来たのが何よりの収穫であつたと思う。

終りに旅行中終始いろいろ便宜を計つていただいた旅行社及び現地の方々に紙面を借りて厚く御礼を申し上げます。

(舟越香郎記)

昭和四十二年度秋季見学旅行記

(甲府方面)

十月二十三日午前八時三十分新宿駅西口に集合し、貸切りバス二台で甲府へ向う。一行は前嶋信次 清水潤三 鈴木泰平 志水正司四先生と史学科学生七十六名 計八十名であつた。

バスは甲州街道を相模湖、笹子峠を通り甲府に入つた。最初の見学地は勝沼町の大善寺。本堂は方五間の檜皮葺で、内部は前二間が外陣、後三間が内陣と分かれており、その境には格子戸と菱欄間が用いられている。両陣とも虹梁上に置かれた組み物は独特の繰り形をつけており、和風を主体とした折衷様式と云えるもので、当地方における鎌倉時代の建築例として注目されている。本尊の薬師如来像は高さ88cmのサクラ材を用いた一木造りである。

次いで甲斐一宮である浅間神社に向う。ここは後奈良天皇(在

位一五二六(七七)が写経したものを、武田信玄が奉納した紺紙金泥般若心経がある。これはタテ27cm、ヨコ50cmの紺紙に金泥で書いた優麗ものである。

つづいて、井上にある姥塚古墳を見学した。これは日本最大の二十数mの横穴式石室を持つ、径60mの円墳で六世紀頃作られたとのことである。

次は前嶋先生の郷里である八代町の町役場で、町長はじめ要職の方々からの歓迎を受け、附近から出土した遺物を沢山見せていただいた。また、附近の横穴式石室を持つ円墳の地蔵塚古墳も案内されたのち、急に暗くなつた道を宿舎の石和町に向つた。

二日目は、韭崎市神山町の願成寺の見学から始まつた。武田家の菩提寺と伝えられる願成寺は最近建てられた収蔵庫に重要文化財の阿弥陀如来三尊を安置している。本尊は二重敷茄子八角九重の台座の上に説法印をもっている。脇侍の観音、勢至も肉付豊かな立像であり、三尊とも定朝様式をふまえた鎌倉初期の作品である。

次いで中道町にある銚子塚古墳に向う。末端部が拡がっている長軸一六七mの前方後円墳で、東日本でも有数の古墳である。内部は割石小口積の竪穴式石槨を持ち、長宣子孫寿如金石銘の舶載内行花文鏡、陳氏作鏡銘の舶載神人車馬鏡をはじめとする五面の鏡、水字貝腕輪、車輪石など多量に出土している、前II期(五世紀)ごろつくられたものとされている。

銚子塚古墳見学をもつて一応終了し、昼食とブドウ狩りを兼ねて勝沼に立ち寄つて、往路と同様に甲州街道を通り午後七時に新宿駅西口で解散した。なお私達を快よく迎えて下さつた八代町の方々と、いろいろと便宜を与えられた前嶋先生にお礼を申しあげます。

(藤村東男記)